

和太鼓は生きて
いる楽器
全身全霊をかけて演奏する

かわな まゆみ

1967年、東京都生まれ。83年、大妻高校在学中に助六太鼓に入門し、セミプロとして活動を開始。86年、大妻女子短期大学を卒業と同時に、太鼓集団「天邪鬼」の旗揚げに参加し、本格的にプロ活動を始める。99年、国立劇場主催の「日本の太鼓 オンナが打つ」では、日本を代表する女性和太鼓奏者として紹介される。アメリカ、イギリス、ブラジルなど、世界40数か国で演奏活動を行うなど、和太鼓の国際普及にも尽力している。

試行錯誤を重ねながら
必死で練習

「和太鼓はすごく奥深い楽器なんです。だからこそ、魅力があるし長く続けていけるのでしょね」

いきいきとした表情で語る川名真由美さんは、太鼓集団「天邪鬼」を代表する女性奏者だ。天邪鬼は一九八六年に発足以来、日本の伝統芸能としての和太鼓にピアノ、ギター、三味線などいろいろな楽器を取り入れた、独自のスタイルを創りあげ、新しいジャンルの音楽を生み出してきた。日本初の和太鼓のプロ集団である助六太鼓で、中心的なプレイヤーとして活躍していた渡辺洋一氏と、中学・高校の同級生で、川名さんとは今も良きパートナーである小川ひろみさんの三人で結成したのだ。

「私たちがやりたかったのは、新しい和太鼓を創りあげていくことでした。和太鼓は歴史があるので、その伝統を守り和太鼓本来の音を大切にしながら、創作を取り入れたパフォーマンスを創っていききたかったんです」

川名さんが、和太鼓を習い始めたのは高校在学中のことだった。文化祭で三年生の有志が太鼓を演奏するのが恒例で、かつこ

いい先輩の姿に憧れたのがきっかけだったと言っ

「先輩が太鼓を打つ姿がカッコよかったんです。そして、三年生になったらやってみたいと思い、私と小川を含めた計六人の友達とチームを作りました。練習するには先生が必要なので探したところ、天邪鬼のリーダーの渡辺先生が当時在籍していた『助六太鼓』という伝統と実力のあるグループの方々が教えてくださるようになりました。おかげで、学園祭の演奏は大好評でした。それから太鼓に夢中になりました」

太鼓というと盆踊りのイメージしかなく、プロがいることを知らなかった。助六太鼓が奏でる組太鼓だけのアンサンブルは見事な演奏だ。そんな、プロの演奏に魅せられ、川名さんは短大に進んでからも和太鼓を続けた。就職を考えなくてはいけない時期になっても、自分には和太鼓しかないと思っていたと言っ。そして、卒業後は迷わず和太鼓の世界に進む決心をする。

「中学・高校・短大と私立の学校に通い、教職の課程もとっていたので、太鼓以外の道に進むこともできたかもしれませんが、でも、そこは他の道に進むことは、一切考えていませんでした。何も考えずにがむしゃらに進んできたという感じです。短大卒業後に、渡辺先生が天邪鬼の発足を考

川名真由美
さん

和太鼓奏者

えていらしたので、迷わずついでいくことにしました」

そして、親友の小川さんとともに渡辺氏の厳しい稽古を受ける日々が続いた。試行錯誤を重ねながら必死で練習に明け暮れて、わき目もふらず太鼓を打っていた。

「太鼓の練習と筋力トレーニングをする日々が続き、渡辺先生からは厳しく指導を受けましたが、必死でしたから辛いと思っただけではありませんでした。それから、少しずつ名前が知られるようになり、次第に公演の回数が増えていきました。そして、和太鼓を始めからの目標だった国立劇場などの大きな劇場での公演、海外での公演を実現することができました」

女性にしか出せない音がある

樹齢六百年から七百年という木をくり抜き何年も乾燥させてから、牛の皮を張ってつくる和太鼓は生きている楽器だ。そのため、精進して自分を高めていけば、太鼓は必ずそれにこたえてくれるという。

「演奏する時は全身全霊をかけ自分の持っているすべてをぶつけます。精進して自分を高めていけば、太鼓は必ずこたえてくれるのです。若いころはがむしゃらに打っていました。年齢を重ねることに表現方法が変わってきました。奥が深い楽器です

ので、今後どのように変わっていくのが楽しみです」

和太鼓には、男性が奏でる楽器のイメージが強い。男性奏者でも筋力的にかなり厳しいと思われるので、女性にとってはどうなのだろうか。

「筋力的にはかなり厳しかったですね。でも『痛いからもうできない』とは思いませんでした。もともと、運動をやっていたので、練習を続けるうちに快感になっていきましたから。太鼓の音というのは、大きくて力強く美しい音を出すのが一つの課題です。太鼓を始めただばかりのころは、男性に負けないように頑張ろうという気負いがありました。でも、十年を過ぎたころから、女性には女性にしか出せない音色があるんだと気がつきました。男性的な部分も出しながら、女性的なやさしい音色も出せるような、いろいろなことを兼ね備えたプレイヤーでした」

もっと太鼓の良さを伝えていきたい

天邪鬼は発足して、今年で二十年目を迎える。国内のみならず海外での公演も数多く行い高い評価を得ている。

「アメリカで観客の方のための公演をしたことがあります。風船をお腹に抱いてもらって、太鼓の振動の強弱やリズムを

体で感じてもらうんです。私たちの演奏が終わると彼らは、胸を強く叩くジェスチャーなどで、感動したことを伝えてくれました。このように、世界のいろいろな方に感動していただけるのは、演奏者冥利につきます。太鼓の音は、赤ちゃんがお母さんのお腹に入っている時に感じていた心臓の鼓動に似ていると言われています。ですから、だれもが身近な音に感じるのはいいでしょう」

たくさんの人たちに太鼓を伝えていくのは、和太鼓奏者としての使命。そして、夢は和太鼓のための総合施設を建設することだと言った。

「和太鼓を幅広い年齢層の人に楽しんでもらい、太鼓を通して様々なことを学んでほしいと考えています。ジュニアには芸を学ぶ姿勢を教えることで、我慢する心、人を敬い感謝する心を育てることができると思いますし、シニアの方は太鼓を楽しむことによる肉体的にも精神的にも健康でいられるのではないのでしょうか。いずれは、コンサートホール・練習ス

タジオ・宿泊施設などが整っている和太鼓のための総合施設みたいなものを建設したいですね。太鼓を学びたいと思う人が集まり、そこから新しい和太鼓音楽が生まれていく。そんな創造を生み出す道場をつくりたいと思っています」



力強いバチさばきを披露する川名さん

4.5尺もの大太鼓を打つ川名さん(右)と小川さん



日本の伝統芸能である和太鼓に夢中になり、太鼓集団「天邪鬼」を発足。新たな太鼓音楽を確立させ、国内外で高い評価を得る。「道場を開き、幅広い年代の人に太鼓を教えたい」と、夢は尽きない。